

重複 G グループ

1 研究テーマ

「児童生徒の気持ちをより適切にくみとり、コミュニケーション力を広げる授業づくり」
～ツールの活用・検証、家庭との連携をめざして～

2 テーマ設定の理由

本グループは重複障がい学級の小学部児童2名、中学部生徒8名、計10名で構成されている。発達の段階はそれぞれに個人差があることに加え肢体不自由や視覚障がいを併せ有する等、障がい種が多様である。これまでの取り組みにより、音声言語をもたない児童生徒のコミュニケーションの方法を「身体を通したアプローチ」と「コミュニケーション代替機器の活用」により進めてきた。その結果、生徒自身が自分の身体を主体的に動かすことができることに気づき、身体表現での挨拶やスイッチを使っての発信や発表などを通して、自発性・主体性を発揮することができた。一方で障がいの重い児童生徒の微細な動きについては、支援者や参観者などの受け手側の違いによって行動の捉え方が異なることが多く、生徒の行動の意味について読み取りが適切であったかという疑問が残った。また、本グループの中学部生徒にとって、卒業後の生活に根ざしたコミュニケーションの方法や道具についても早い段階で検討していく必要があるなど、2点の課題が挙げられた。

そこで今年度は、誰が見てもわかる生徒の行動の意味を読み取る検証の方法、検証ツールなども模索していきたい。検証方法や検証ツールを活用し、小集団でつけた力を学校内での交流及び共同学習や家庭での生活に生かすことで、本テーマに迫ることができると考える。

3 研究仮説

- (1)新しい環境や教師と自立活動(「身体の時間」中心)に取り組み、誰とでも身体を通したやりとりができることで、対人関係へのこだわりが軽減されるのではないかと考える。
- (2)制作や調理などの「作る活動」を通して身近な教師や友達とかかわることで、コミュニケーションの広がりが期待できるのではないかと考える。
- (3)1学期は学級の教員と信頼関係の基礎を培い、2学期はそれを基盤にして学校生活全般で同性の教員や生徒とかかわりを広げることで、人間関係へのこだわりを軽減していくことができるのではないかと考える。

4 研究推進方法及び研究計画

(1)研究推進方法

- ①自立活動の授業を基盤にして学級の教師との人間関係を培う。
- ②2学期以降は、同学年の他学級から他学年などの同性との交流を深め、人間関係のバリアを軽減できる活動や取り組みを行う。
- ③誰にでもわかる検証方法、検証ツールを模索し、グループの教員との共通理解を図る。
- ④保護者とのやりとりや懇談時を活用して、家庭との連携を図り、般化できているか検証する。

(2)研究計画

5・6月	テーマ設定・研究計画検討、作成
6月	研究授業事前研究会・校内研究代表授業・事後研究会(身体の時間)
7月・8月	中間報告会のための検討、資料準備
11月・12月	研究授業事前研究会・校内研究代表授業・事後研究会(調理活動)
1月・2月	研究の成果と課題についての検討会と研究のまとめ、次年度のテーマ・方向性について、全体協議会への資料等の準備
2月	校内研修全体協議会

